

硬膜動静脈瘻の画像的診断と脳血管内治療による周術期合併症に関する研究

1. 研究の対象

2014年11月から2024年3月までに当院で硬膜動静脈瘻の診断を受け、脳血管内治療を受けられた方

2. 研究目的・方法

硬膜動静脈瘻孔の発症数は人口10万人あたり1~2人と非常に少なく大変稀な疾患です。原因がわからずに脳静脈洞に多数の動脈が直接入り込んで脳静脈洞の圧力が上がり、脳の静脈が逆流することで、耳鳴りや眼の充血、複視、頭痛、認知力低下などの症状が生じる病気です。逆流が多くなると、脳血流のうっ滞により脳が機能しなくなり、認知症や意識障害、衆生では脳出血を呈することになります。治療の主体はカテーテルによる脳血管内手術により行われます。治療のターゲットとなるのが動脈と静脈がつながる部分で、シャントポイントと呼ばれています。この場所を種々の画像検査で同定し、脳血管内手術でコイルや接着剤で塞栓し治療を目指しますが、現在の画像診断でもなかなか同定することが困難です。今までは静脈洞全体をコイルで詰めてしまい、動脈からの血液が入らなくすることで治療してきましたが、コイルの圧迫により治療後に神経症状が残存したり、治療してから数年経過して神経の麻痺が出現することが稀に起こります。このような合併症を回避するためには、シャントポイントを同定し、少量のコイルやその他の塞栓物質でピンポイントに塞栓を行うことが求められます。本研究の目的は、このシャントポイントを同定するために行った各種の画像検査を最新の三次元構成解析ソフトで流入動脈と脳静脈洞での血流の変化や造影剤濃度などの解析を行い、シャントポイントを同定するための特徴的な指標を探索します。その成果は、今後の患者様の治療において、確実に最短の治療を提供できることにつながります。また、合わせて、今まで行った硬膜動静脈瘻の治療を集計し、治療方法（アプローチ方法、塞栓形態、治療回数、使用した塞栓物質など）や治療成績、合併症、再発の有無などを統計解析することで、今後の治療における合併症低減のための施策を検討して行きます。

研究実施期間は倫理委員会承認日から2027年3月31日までになります。

3. 研究に用いる試料・情報の種類

硬膜動静脈瘻に対する脳血管内治療を受けられた患者様の診療録、画像情報から情報収集を行います。治療前の症候、流入動脈、流出静脈の形態や治療後MRIでの脳梗塞の有無、術後後遺症、再発の有無などの情報収集を行います。

4. お問い合わせ先

本研究に関するご質問がある方、また、試料・情報が当該研究に用いられることについて患者さんもしくは患者さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としないので、下記の連絡先までお申出ください。その場合でも患者さんに不利益が生じることはありません。

ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、研究計画書及び関連資料を閲覧することが出来ますのでお申出下さい。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先：

高知県南国市岡豊町小蓮

088-880-2355

高知大学医学部脳神経外科教室 福井 直樹

研究責任者：

高知大学医学部脳神経外科教室 福井 直樹